Centimetres
KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

後醍醐帝物語

13
1304
2

へ13
1304
2

俊寛僧都嶋物語巻之二

東都　門亭馬琴編次

第二套　抱沓留選とゝ　牛若鶴前の事

却説相國入道清盛ハ。如意山中の異寶ゝ〻〻く。西八條へ引くさる。綽の爲体。先〻〻ゆゑ〻〻べ。平氏一ゝの歴〻。恩顧所感の侍。〻れも〻〻と走り来る。三條河原より。黒谷のあなへ馳ちぐぶ人馬。駁〻〻んどいのぐ〻をする。〻れども綽既よ果く。おいさ〻たる徒らゐけもべ。羊ハ相國入道の車を守護し〻。途より〻〻べ。羊ハ山中を特さ〻ぐ〻。餘類の癖者や籠ゐると部し〻く恵るう。鹿猿の外ゐハ。眼よめるゐのもあ〻ど。樵夫只一人よ。雑波妹尾いさ〻ゐと。十四五人の兵をゐし〻ゐへるゐ。旁以不覺のゐり〻。彼ゐの必

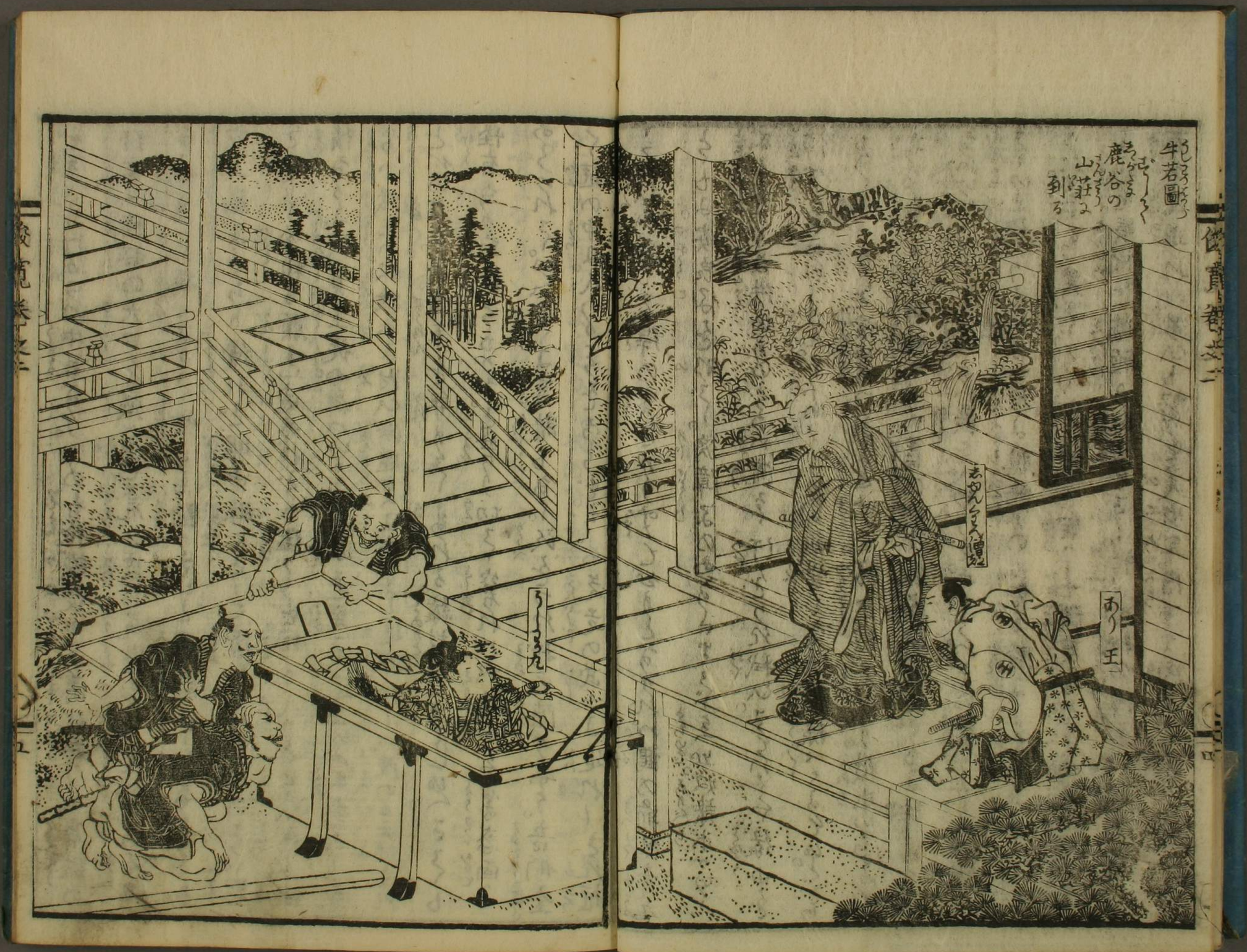
定源家の残党などよりてあらぬそぞろあくして正親が首を籠童の中
より出す。是彼よりたちまちよりその中。平治の役より義朝都を落し
ては降人より出るに同じ。その首をえらく。法然と決定するに
是なん源家所従の兵士。藤田三郎正清がなり。登門を郎正親
と名れしなるべし。僕原は正清が家臣なり。正清待賢門の敗軍小
義朝朝臣より従ひて。尾張路へ没落ちしころ。この正親は十五六歳に
なるを。近江なる所縁のうち残しおきつるが。今より五つ六つ程長じ
ちぢ。且目尻より黒子あり。是紛うべきもなくその人なり。抑正親幼
稚より膂力人より勝れ好む相撲柔術の勝負を試るに。その右に
出る童なし。十八とのへども。倆ぐらべ。ほえ。ぬ十三四歳より及
ても。竹節を拗。鹿角を擘くに。その力量いとだりとしるべきなり。

ぶ。木長のごとし。ちひさきこと。父正清も右を振ひ。ひしぎ。されば。
千引の石を。鞠なんど摶をごとく。彼処の高峯より投下しに。ひるまれ。
ぬれども相国をば。神も衛佛も助めへ。彼石ざまに脱れ。
運めでたく生ぬるれと。一五一十を物がたれば衆皆笑ひ。さて正
清がまこと。り難波妹尾が命を落せしあくまの癖者
をとり逃しぬ。あらんぞ。宴に入道殿へ。郎党をもて
すへ。ぬ。只管に稱賞し。おのく。えらく。緑由をさぐりば清盛
笑もあへず眉を顰。そは正親一個の所為なるべく。今都にて
頼政行綱あり。土佐に冠者希義あり。伊豆に兵衛佐頼朝あり。鞍
馬に牛若那王あり。なを是源氏の家中に。努く油断もべからぬぞと仰せく
被て正親が首を三條河原に梟させ。その比くに本人を。穿鑿もべ

うをひん會らる。案ず某生再説俊寛僧都ハその日妻子をゐて鹿谷の山荘ニ赴くニ。平相國如意の龍見ニ出あへとく。里人ホ罵あひく之さらく。径ニ道をうちぐく。北向何うニ山中越ニ指うくニ。挑谷石野戸の山間を径くゆ山荘ニ到ることぬ。ちくるニ蟣王ハ今朝奴隷ニ扛擔し。先ゝらく半ばゝる。長櫃の某さひしくべ。ふく訝ニ主の俊寛ニうくとまうせば。俊寛ハ彼ホ相國の龍ゑを志ゐねば。如意越ゐを登う来く。遠ニ抑留せゐれ。ゑひの外ニ遊蕩するあ欲事ニ懈るゐ奴隷の常ニうち捨くおけ也とゐくその言語いまゞ作くむ。如此如意山のうと騒しく。奥ゑの音響ニ響人声遥ニ聞えしゐ主侵軍を側つ。これを怪ニ。一人物熟ゝる変卒ニ。絳の容をうとく。あれとく。岩尾山のうえ遺ゝうり且くしてその人ちゝ降

てきうゑ。僕如意山と岩尾山の間ニく。薪樵る翁ニ問めゐ之みゞ絳の廷を問ニ翁答ゝく。志賀の樵夫ニ。澄門ニうるゝの平相國を狙ゐんとく。如意山の巔ニり。磐石を投懸立ゆ。牛も車も。うち砕ゆくゆゞ相國いかゝるゆやとく。副車ニ乗ゐゐゐゐ。ゑゐ駕ニ志ニ。彼澄門ハ脱ゐる道ニ。毅の兵と血戰ゐ。妹尾難波とゆくゐゐゐ六波羅武士と相拒ゐて。瀧のほとりニ仆れしゐ。さくゆの澄門ハ。源家の兵士鎌田正清が呪ゐて。万夫不當の剛者ニうとゐるゐのゐりそきうゐ。径ニ。ゐほ本人の躯居るとりやとて。毅の武士貝殻を鳴らし。鬨声を揚。狩さくぐゐそゆ。されゞ弱も物の凄ぐくて。げゐハ彼くニ問るくゝ必しも。麓のくゝるゐりゐひそ。捕ら志ニく。ゐゐもかけれ濡衣ニ。可惜命をうゝるゐるべゐれ。とゐひ果ゝ。足ぐゐ

よ別れさしとゞめ。聽ゝ〳〵立せ給ひ。とゝてゝるがごく物ぐるゝ。俊寛い
ひと卒意うゞよ。法師天窗を搔撫つ。嗚呼彼澄門とゆゝゝ蒼海
ゑが勇めりと。忘いゝゝうゞゝ。るゆ知〳〵ざるとそうゝゝこのれ。猶彼く
巖よ打出ゝ。醯とうるゝゝ。成親卿の宿望い。労とぞゝて果し
ゆゝべよ。さそもらゆゝ住とゆゝ。人の命運ゝゝゝと。意の由よ嘆嘆
しと。ゆほそゆゝらゝを問んとゝる折ゝゝ。長槌を扛擔する奴隷ども。
顔のゑい。夏山の松ゝゝ。牧青〳〵ゝゝゝと。ゆゝゝゝ。俊寛が
端ゝゝ〳〵ゝをえゝ。槌を揩折戸の内よ扛ゝゝしこのゝゝを
を窺へゞ。蛾王待ゝゝと。近くゆゞゝ。汝逆中塗よ抑留ゝゝれ
ゝゝゝ。平相國の寵えよ出ゆゝゝ。ゆゝゝゝ。故ゆゝらどゞ。相國を怨んゝる。
癖有ゞゝ。俘い面めゝりえゝゝゝ


牛若圖
鹿谷の山莊に到る
あり王
うしわかまる

ぞえうりけるられ牛若なり。その折拾。鐵漿黒み薄化粧して。唐織の特衣よ。精好の大口を張らせ。虎の皮の尻鞘ちらく。金作りの太刀を佩。意気揚々として。些とも騒がぬと。萬闌く艶なること。京上臈よりもまさり優れど。眼中睇くして。清れと秋水のごく。怒を含く冷視る顔色。威あれども猛うまど。神う。人うとりしぎの風情なりよ。俊寛主従あれいうと。呆止果て。迭よりの不をたうど。當下蟻王い。奴隷ホよ対ひ。決逆妻よめいく逗滞ちい。理なるよ似られど。伝のなよこの女年を早りく。あれる。縁故をもちしゆ。さくも怪有なる白徒どもなみと。苦り切て。寒れば。奴隷ホを當惑面よあうれて。ひとくよ言語もの。氏をつた拝て陳ゆる。吾仏全く柩の中よ。人あうをちうどめ。先立の武士よ追れ。柩を早りて退くよ遑なく。木の下よ捨あたく。籠の背よ躍ひて。人音静なりよなりく。舊の処へ。ふとてうよ。誰とうたうど。柩よさしる搖棒を引抜くゆひ。がび忙くうれば。矢庭よ杵をさ。入れつたうよ扛りくあうるく。今くるくうくび女年が。柩の内へ潜び入るうと。杵を引抜ゆひ。をびつぶりしうと。戦度すれ。彼人よ向あうぶ。絆ゆめづうう分ゆ。よゆうんうと。回答けり。俊寛とうれをばう。たぐ。寄ゆ。ひうう兵衛つ女年よ対ひ。向よ。鎌田正青が。児子。澄門行ぐ。平相國を強ゆん。とうく。本意をえうとぐど。怒池洙ちくれうとどたうよ女年。ゆ柩よ躍ゆ。彼山うるよ。時剣もうるぐ。澄門をうくゆうる。本人よ究ゆうり。察ちうとうろ。源家の九曹司ようと在とどられ。ゆゆ法勝寺の執行俊寛と。名告ゆ。六波羅へ。ひとまれて。入道どの。感

よ頑ゆうんいうよぎふと結向い半若莞ホとうち笑う。推察よ違ど。
うの長槇の内よ躯出さく。ちぐ〜敵の英気を挫てるい再く卒意を逐
ろく。卒軍数百の兵士さく。屑ともりいねりのを生法師の分際よて。
搦捕んうい舌長〜。うれうの山荘の気運をうゆひうてるよ。殺気内よ
満く。事を謀る閑室るり。執行も又隠謀の企ありや。いと呀〜と笑へい。
俊寛ゆもめへぞ大よ驚ろ旦その聰察虐悟よ感伏〜にを謀く居
うりしが。忽ち叮くとうち笑ひ。少年その身の縛を脱んれよ。根ま云
ないひめこそうれい是出家こいうく隠謀の企あるべ。前のぞ〜いひ
ちく八。一時の戯とのこ鴉戸も窮鳥を捕らど。猛虎い伏肉を食い
ぞ。慈悲い如来の本願るり。う〜や源家のれ曹司よ在するとも。ぞ〜で
うも思意あるよあうんるのは。はえやわううこべうるよ変りれど。

ち〜いと端近く。蛾王客房へ案内〜く。官待まわ〜をとうあ意を
ぬぐ〜いあれど。蛾王いちぶ。奴隷ホよ。長櫃を背脱のうく舁へさし。
聽く牛若を誘引つ。廊をうち続てくよ。私の前い。躋の前
とくもよ。のく隙うりれを月送てさとも鴉園ら安年るる。女よ
ようちもえちほ〜りれ。女児ものるるひでよ。ゆく皆をも〜ほ〜ほ
うい。さをる喜〜〜ぬ。といいうけく。躋の前をえうるよ。躋のお
い顔うち殺めく。母の後方よえうられつ。ゆ〜て俊寛い。安良ろう
仰く。雀俵の偏提をひうう〜。ぶぶ〜孟を挙く御曹司よ。ぬ。
四表八表の話の序よ。扇笏よとうく〜ゆるい。ゆ倉卒ある申條
ようゆへど君が面影のうく義朝臣よ肖く在られい。彼左典厩
朝の遺腹子。鞍馬の牛若先るくんとう晴〜たり。俊寛安〜うり。

ちろを氣遣よ解〜。瑜伽三密の行者〜とうとへども。村上源氏の嫡流なり。祖父稚俊卿のひざま。猛りつるうゝ。世の人のちることろく。頼〜くありひめへ。身よ物えたちも舎藏進らとべ〜と信〜ちてい。その言語伯るゝ〜ゆえ〜〜ば。牛若うち兵氏〜。ちゝうへい匿り〜ゝ。義朝が季子よ。牛若と呼んしるへうがゆるゝ。母の仰よ〜ゝ〜。七才より鞍馬よ登山〜。東光坊の才子とゆりゝ。今の名い密那王とどいゝるゝ。ちゝるよ清盛入道い。與よ天を載らざる讐ゝれば。いゝゝも〜ゝ怨を報ひ。父祖の怨雉よ供んと。夙よ夜よりひ忘ゝ際もゝ〜。近日鞍馬を窃出。奥州へゝるべく。その用意いゝ〜〜ゝ。単身ゝゝ。道のほども便ゝれば。如意山中よゝゝゝゝ。その外よ日を過ゝ〜よ。ゝゝゝも。播代の家隷。殿門右京正親といゝのよ名告めひ。如意の灘見を幸よ。清盃を狙ゝ殺んとゝ〜よ。その子茅〜〜ど。正親をさへ討ど。辛〜ど難の敵を殺脱。ゝよ再生の恩惠を稟ゝる。過世ゝゝる契やゝりゝん。源家舊恩の侍も。平家よ媚を求るいるへゝの人のゝゝゝゝ。執行ゝゝる舊識よも行〜ど。ゝゝるをゝ〜懇切よゆえゆいとゝゝゝ。ゝれと回答めへば。俊寛満面よ笑を含ゝ。酒をゆん盞を添よゝ〜。傷よ行りつる蛾王安良子を退〜。さて膝をゝめ声を密。ゝ曹司。愚僧をゝ〜。舊識ゝゝゝゝ。寛雅法印と君が祖父為義朝臣ゝゝ。師擅の笑をひれ。そゝゝゝれかくもあれ。ゝゝ〜と奥州へゝりのよ。ゝ〜。この山荘在家を隔ゝれば。世を潜ぶよ究竟のゝゝゝ。いつまでもゝ〜よ坐

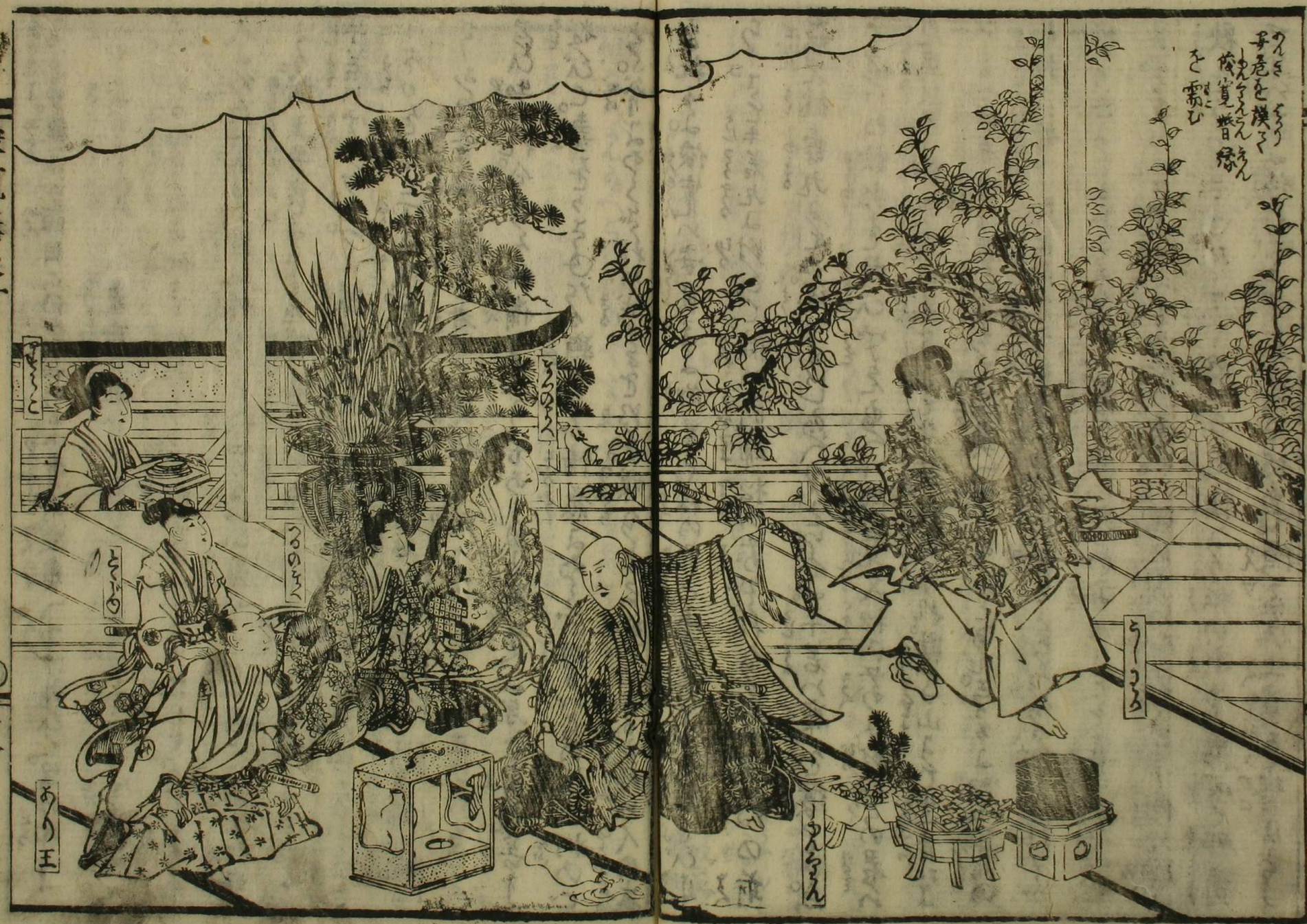
ちよ。愚僧よ一人の女児あり。名を鶴の子と呼びて。十四歳よりね。礼王の質あり。弥雪の才乏しゝとゝへども。よろゝ〳〵繞書の嬰こゝろべ〳〵。り〳〵梵女児こゝろを嫌ひあいどゝ。ほ〳〵ほ〳〵よ箕帚を執ら〳〵。あぶ〳〵潘揚の好を蒂びゝん。聽ゝくゝとゝのよ。牛若回答たゝ〳〵。襁褓の中ゝり父を喪ひ。久〳〵く朝敵の餘類よ係累して。落魄〳〵ゝるこの身ゝて。妻を擇ゝよ如ゝ。ゝるゝを僧都。最愛の息女をとゝ〳〵。妻ゝ〳〵れんゝちよゝる僥倖ゝり。さんゝゝ。一日の妻居をゝりゝて。僧都親ゝを係累ゝゝるゝゝゝ。息を仇めゝく報ゝゝゝ。ゝも平氏をゝゝ滅さんとゝゝひゝゝゝるゝの日よ。命運を天よ任せ一処不住の牛若ゝゝで婚縁を待んや。ゝんゝゝひもゝけどゝゝ。推辞ゝへゝ。俊寛堪ゝよゝゝゝゝゝ。

聊も妨ゝ。近曽亞相成親卿ゝゝゝ企ゝゝをゝゝ。同意の黨をゝり〳〵ゝの山荘よ會合ゝ。俊寛年来成親卿と師擅の契ゝゝよゝゝゝの隱謀よゝ〳〵ゝれ。肺肝を摧とゝゝども。せよ漏ゝんを憚ゝゝ〳〵。妻ゝゝゝゝ。腹心の家隷。亀王蛾王ホゝも。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝ私の宿意のゝよゝゝゝゝど。後白河の上皇も。内〳〵卿同意ゝゝ。夫萬卒いはゝゝ。一將ゝゝゝゝゝゝゝゝ

仰寔おろけゆろぬそも同意の輩ハ雖くすりやと同めへハ俊寛右ゑ
の指を傳めやづゑ卿ゑん。成親卿の嫡男。丹波少将成経近江中将へ
道蓮阿。武士ゑん。ゑ田藏人行綱。られを今一度の大将軍ととその外
平判官康頼。左衛ゑ入道西光ゑるんど。北面西面の輩ゑ至てゑ。毛拳
ゑ遑めゝどゑる金石の志傳ゑゝゆとゑろうゑ告ゑけゝば牛
若丸果ゑゝ嘆息ゝゆゑ。ゆゑ不ゆめゝはえゆへど。行綱ハ源氏の支流
ゑ似げゑゝ。その性危忽ゑゝく謀寡ゝゆられを大将と憑めゑハ。不
覚の至りゝ。且康頼の狡薄ゑゝて妻然ゑる。西光ゑ才ゑゝて時を
得げゑる。所謂饗上の蠅井底の蛙ゝ。加之嘗世の風波を少て
ゑゑ縁起を察ゑるゑ成親卿ぶゝく近衛の大将ゑゑを殺めへども
その身稱せ。送恨ゑゑゑ隨ゑ。清盛一家を滅ゝて本意を

遂んゝゑゑめゑゑるべ。ゆゝとその世の乱れ君の為ゑもめゝど。貪欲を名の
軍を起ゝゑ。平家の鋒ゑ向んハ。卵ゑを石を打がごゝく。彼精衛といハ
鳥の木石を銜ゝゑ。大海を埋んゝゑ。遂ゑ溺死ゑるゑゑも。
ゑる所愚ゑゑる不知ゑゑゑ。人妻られば天ゑ勝。天定ゑて人ゑ勝ゑゑ。
申包胥が金言ゑゑ。平家恣ゑ高位ゑ居て。天ゑを挟て。所従妻
ゝられ人妻ゝて天ゑ勝ゑゑ。真ゑゑゝゝく起ゑべゑゝ。成親卿の不覚
ゑ論ゑるゑ足ゝゑど。執行今ゑの隱謀ゑ荷擔ゝて。元暦の輩と勝
を組額を合せゝゑゝゑ。どゝを耽ゝめゑゑ。学ゝて功を速
ゑゑゑゝゑゑゝゑ。と成敗ゑを拒ゑゝ。明白ゑ禁めへ。俊
寛頻ゑ感嘆ゝ。大息吹ゝゑゝゑゝれ曹司の殘論。寔ゑゑゑ
ゑゑ。愚僧ゑられを知ざるゑゑゑねどゑゑゑゑゑ。弱ゑゑゑ。

其親卿よ。蹇後の恵を禀しく。うり。水火も辞ぢと契ーうが。好も互も
うりこと。今度の隠謀よ。ものを。今さに。ひ離れ。と。絆な
らんか。かろともよ。ろんの。曹司。ろ。橋梁の信を憐こ。ぬ。
が。婚縁を兼引ぬ。源氏の嚴原。ろ。天の生せる大ね軍。君が右
よ。ものの。ろ。ねが。終よ。を。賊ー。と。會稽の恥を雪めた
ろんこ。ろが。眼を東門よ。戴ぢ。今面。ろ。ろ。ろ。大ねよ
縁ーを締ぢ。女児が。久後。ぬ。ぢ。縱俊寛が法師首。ふ。ふ。妻
や孩児。ぬ。ぢ。ろ。ぬ。ぬ。ぬ。領諾。ぬ。と。涙を
流ー。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。蛾王。安良。ぬ。紙障。ぬ。ぬ。ぬ。
ぢ。ぬ。と。俊寛が。成親。の。隠謀。ぬ。ぢ。ー。を。ぢ。と。果。夫婦。面
を。ぬ。ー。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ


俊寛僧都
ろうのろく
ろうのろく
ろうのろく

なるる。親ゑが面目ちのうへやある。ii曹司陸奥へくりあひとぴつの此ところ
ゆうすまやさん。ちうね東路へ張ぶちあうんうう。あるぐくいとさよ生たよめ
ぴへがめが仏ちたよ似ちく切れども。執行が平氣ども編ども。ちうづ憑した
人よ切れがめ〳〵対ひ切ちし。と信ゆうよひと慰めく。官待ちあよは場
ちう。賢王安良ちもちうた婿君を招あひとひと愛ちうと祝ーちうんを。
牛若ハゆうけとつと縁頼よ立ち。養ちよ近た青梅のたつあう一枝を
小ちかを抜と丁と伐られを携ひと。驚の処へ立帰ちう。士、夫婦が間よ
さうあた。青梅よ酒を煮ちく。英雄を編ひたる。震且三國の故事さへ
ぴひ生れ。今ちうれ劉備ちうたうもあーねど。荊楚よ分をあと。昌ちう
拝びと。妻をちうさよ切る類ハちうぶ情愚よあーび。辟言ぴちの梅の柯のど
ちく。斧よあーちぶれハ伐ちを切ど。蝶ちあーちハ愛らざる。夫婦ハ人の大

倫ちう。えあへちの梅も。冬ちうり含て春花さた。今ちーあちよを締ぶ。
牛若ハ舎のぢ。用もちうハで夜あーひよ。散も果あが結ちて。妹夫の
縁ーもちあのひちう。ちの枝を伐ちうたあちぶ。これ奥別へ赴たく。三
年が祖よハ切りあちべ。昌ちの時を待あへと。梅よ辟言ーを名ゐの
雅枝ハ殊よを秀あり。俊寛ほと〳〵感嘆ー。大丈夫の一言ハ。馳ちると
ぴへども追ひぢひ。ちうの不偽ちあ〳〵。三年ハ切論五年も。十年の後も
ちんぴたが。紀念の一種を送ーちた。女児が切を慰ちぶちうたも
ちうあへと。昌官よを求ーちぶ。牛若九已ちハ切ど。墨平の筆のつ注
ちうを抜ちうと。あちる扇をあーひた。
　色も香も春を契ちる梅が枝よ締べる実さへちくとあちうん
と書とぶ。梅が枝よ結びさげちう切あへが。俊寛ちうへーは。

吟じ果て大よ歎びられを松の前よ遍与ちらば松の前も世よ喜
いしに気色よく。猶て鶴の子よりとりて。時よ俊寛ゆを立
て。ずうと袋戸の内より。帛の嚢よ納ちりて。笛一管をとりいだし。
うへく右よ棒ちて。牛若丸よ与へ。この笛は内院殊更
より重愛ましく。小枝と号ひしるをぞ。祖父京極の亞相雅俊
かあり。今俊寛よ至るまぐ。三代相傳の重宝なれど。絆のうち
らば〜さよは曹司よ進らせべ。君なるとたく推ましえ。小枝の
笛を梅が枝の蕾なる婿引出ぶ代を壽く世よ由笛といふ
なも名絃自性納めへとさ〜出ぶ。牛若これを。左右のまよ受
て押戴て柯亭蟬折よりも芳らざる。在院恩賜の名笛をあら
ぶ。称びられまんりのまる。ぶ〜日も西よ傾たぬ。夜よ紛れて

陸奥へ旅ぶつべ〜。宴よ酔ざる底を切て。辭せるよ遑なり
と宣ふよ。俊寛哭ふ〜ハ笛ゆ〜ハ。君奥州へ行りあらば。ちらしさ
保倍よ。附挽して進らせるん。三條の商人よ。吉次信隆といふ豪
家あり。他年よ。陸奥へ行る金商人なれば。秀衡が館へ伺候を
とゆ。ちられが年来懇内の者なり。且ちが手。信隆と師檀
の契あり。さるよりて。きのふ彼男京極へ詣ぶて。あさて例の
東下りいさせるとぞ。貞の暇をもらさんれよ参れ。とのもに。
ありのよ彼が起行ハ。おのの和らぶなるべ。これ今一言をもとく
憑をぶ。慨〜頼もしべ〜。と絆詳よ説たしさて蛾王のもあう。
汝たのびゆよ。曹司のあんの供〜て。三條よ赴て吉次信隆よ對面
して。笛様ぞよいひ〜ら〜。と立帰て。返命をたらもよ。ちれも

今宵は京極へゆくべしとて使をまつべたぞ。とうとうそのころを沼さう。絆既よ怒ひぬ。かくと半若へ。ぱっくぐる。主夫婦の好意を謝び。ぽえ。鶴の前徳壽丸よ別を告。その夕られよ。蛾王よ御道さうく。吉次が宿処へ赴たまへば。俊寛親子別を惜く。彼此よありつた。みのひるが。吉次が下向よ跳て。音耗ゲセぬくやとたのぐうよえもいろね。女房よ代る姑の愛くくさよ曹司も。再會を契アつ。松明ありそう。七蛾王が。後よ跟くくさきへば。俊寛い諸れ戸のほとりよ立ち。ホがうくゆうで目送れど。影とめあくね莫の水よ。小鮎とぼくホ下間。松明の光も山路の露よ。滅くくゆうよりり。

第四套　抱新枝燃

細を脱ぎ輪よ吻　備都が妻子の事

かくくその夜初更の左側よ。慌ぐく山荘の門戸を敲くめりり。

門成る奴隷。雅と同ぐその人。蒼くく。成親卿ようり密夏のん使ようり。此よ執行こ中くくとりの夜い寂莫くる山荘の母屋の向も遠くくれば。俊寛くゆくの声ぐ。ありぼくとり呀ーとひとりどう。連忙ーく安良よ紙燭を乗ぢつ。出居の両戸漏あけくくと。端ちくくくくち出ぐて使者をぼび入くくよ轎夫雖奴五七人。先よ簀火をふくとして。一挺の轎を門の内へ舁のれひとりの主侍。縁のほとりよ出くくり。御の板よまをもたく。俊寛よ向うとゆう。主君成親。今夕鹿よ會合をゆくある不。備都京極よ。ぶくの山荘ようとりけあくり。夜中うれども。ん迎くくく。奉判官中ねのくくくのんどう。くくよへくゆをひろん。舁ーくれる轎もへば。呉そがくくく。ん出へくりとりふ。俊寛ゆくく眉根を合せ。亞相のれ鈷よて。今夜會合あくくふ。ゆも及ざりしよ。この処ぐ迎の人をまくくふ。ぶとぶりとぶ。

洪達且く休足せよといひて内より立出り。松の前より緒の数を伝へ
うんちゝ。法衣うん絡ひつゝ。ぜんとまるを。松の前に夫の袖を引留。小夜と
いひ。山路といひ。彼方の人のこゝろもそれぞつゝ。ゆり。れ。ゝ蛾王にいさぎ
ゆ。ゝ。ぜ。ゝも。此方ゝも。一人二人の従者にわ。ゝ。ゆ。ゝ。ゆとせ。ん
胸さゝ。ゝ。ちさ。ゝ。ぜ。ゝ。ゆ。ゝ。ゆ。ゝ。ゆ

西方寺山ノ蜘王
法覚ノ達ム
あり王

退る。脇添の武士声をあらしたて。六波羅へ召さるゝ囚人法勝寺の執行と
ありて。ものゝふどもを引ぐ。物ども這蚯を脱しなんとて力め鞆て
まをあれば。蛾王ゆゝ些とも臆たび。仰うけあらひねたれども。
俊寛行対の罪あり。妻つぐまちりいろねを。猛よ花龍あんとて。
殘者の中言よし。儒衣を被ちゝ。とりて。といせもあくと。件の武士蛾
王を待とゝ。漫入り。罪うれものを縛むへ欲。今度年親を
の謀叛ゝ子。世を乱さんと計被ゝ。俊寛。康頼。蓮阿。西光ゝんどかゝ
の乳侍を出をちるものあるよろて。禁獄ちゝ。ゝ。難彼二郎
経遠が弟。三郎経房。入道相國の仰を稟。京極の宿処へを向つる。
俊寛ハ妻ゝを引ゝ。鹿谷の山荘ゝ。ゝ。ゝ。

つかぐもらが先途をえんとぐけ。世よりうたるん足弱ホが。杖ともうる
いうひろうれも喜ゝくらめべし。狼狽ゝりやと一言の死よ迫られて。蛾王の憑と
りよ。勇気も撓ゝ撲地と出しゝ。男泣るぞ泣よる。難波三郎いさゝ覗こう
呵ゝと冷笑ひ。やるる向徒よ。やづらひて。可惜時則をうゝたり。へ乃屋の
さうを待うびゝ。ゝゝんゝよ道塞やと下と蹴る。主をえまよ雑兵ホ
もを。ロ偏乱して蛾王が。肩尖項の縛ひゝ。数回踏ぐと。哭と笑ゝ
細輪の後方先方よ立つぐひ。列をぶゝと立て去てね。ちうよ難波三郎
経房ゝにゝ言ゝ。物難しる兵二三人よ。謀を密張て。逆うゝうて
えさゝ。蛾王がゝくべた方を窺するゝ者ゝぐゝ。ゝよ刃を起ゝ。
蹴ゝんゝゝうぶ身い疲ゝうゝぐ。主の難義よ胸を痛め御を憚ゝよ仇
うんゝゝうぶ身い疲ゝうゝぐ。主の難義よ胸を痛め御を憚ゝよ仇
うんゝも。跡見よつひて。六波羅ゝぐ。えがれよりん供ゝぐゝ。

いゝぐ何度もたゝぐ立ゝる。夫人孺君のうへもひゝとる。とやとゝぐ。ゝゝや
ゝゝぐとゝろひゝろよあたゝよ。彩もえゆうぐ咽るよも。ゆゝゝ片田の雁な
らぐ峯越うびゝた風情よゝゝ。ゝゝくよゝひ定めゝ。ゝゝ兵衛ゝ裳さい
ゝ鹿音へと走ゝる夏の夜ゝ。ゝゝゝよ短くて。遠寺の撞の数同ゝ。ゝ丑三よ
ゝゝゝゝゝゝ子よ係る寂滅の声とゝゝわぐ案の前い。更ゆゝゝゝ
いゝ蛾ゝゝぐ鶴の子おゝろともよ安良子よ原氏を読ゝ。蛾王が咽ゝ
ゝゝゝを。今ゝゝゝと中ゝ行よ蛾王い喘ゝ山荘よゝゝ着門高ゝゝうち
敲ゝゝ。ゝゝゝを迎ゝと走ゝ入り慌ゝゝ案の前のゝゝゝよゝゝゝ中
ゝゝゝ。いゝぐゝゝゝゝれぐゝ。ゝゝゝ親々の隠謀よゝゝゝゝゝよ
ゝ。綽既よ畏顕。難波経房対ゝゝゝゝゝゝ。ゝ秋々の使者と称ゝ
極く泡ゝ出ゝゝゝ。輪よ細を被。ゝゝよ残ゝゝゝゝゝ兵士三四十人是

をとり巻六波羅へとゝく。おゝく去そぬ。某をゝゝども西方寺山のほとり
まゝくゝ。めあひまり。奪ひ〳〵ゝまわゝせんとかの鞆よりをめけゝが。如此ゝゝ
の仰黙止ゝゝ。去り。ゆりてゆゝあり。狐疑爰に入道相國再て討ゝを向け
られるべいるゝゝ。脱れゆゝん天の明ぞる間より便宜の地へ落ゝまるべゝ。安
良ゝも狼狽る。裳ゝあげ。下括の紐締るほゝゝゝゝ。といひ果て又
忙ゝく。納戸のゝへ走りゆゝ。路銀の准備をするゝ。窠の前鶴の前ゝ
ゝゝそもいゝゝと泣叫びいとぐちんまべるゝゝ。假寐ゝる徒寂光も。
袈裟とぐゝり結る。紅黛ゝゝゝと塗怒ひて。四の袂より携帯理るれぞ
安良ゝも慰りゝ。夏の夜の雨わかれが涙ゝて。笑ゝ杖ゝと立さて
紅ゝゝゝゝゝ。行裝いとぐゝりそいそぐゝて。ぐゝ。ゝる外いゝゝけ。當
下蟻王に納戸ゝゝ走り出ゝゝ。安良ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。のゝゝも憑

しげゝ。ひゝひるゝゝものゝもを得ゝ。あつぶ。却路次の妨ゝ立さぐゝ。
て奴隷ホよゝゝゝる。越前國水仁庄ハ。故郷ゝゝ。父里居三郎ハ年
ゝを考ゝ。ゝゝ信ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

勇ましく太刀を帶て
戰王山荘
小主を脫ぬ

頭ゝり跳ね上がるべしと思ひ給へれん。経房吾倅を跟めたれば先ゝ
ちゝ行ゝと久しく。推とも謀叛人の孫児徒壽丸女房女児も罪に服ぜど。
とく縛めを受らと呼ゝり。庭に出て塞ゝとせめ〳〵と蛾王が走ゝ
ゝ〳〵く撲ゝと投退。又組着を胸前含て戻ゝとする力量早抜弥が
ゝゝと投ゝゝ。向ゝ跳ゝ足ゝ〳〵ゝゝゝ

ぞくよりはじめて。清盛ゆゑ。且孫なれば。且恐を。時を移さず。成親卿父子。以下の黨を悉く搦捕て。西八條へ押籠られ。後白河院をうらむ恨を。もらすに。不遜の挙動あり。しかるに。嫡子重盛いたく。練て。緋ぢりめんの。落ぶねゆゑ。五月下旬より至て。罪藉既に定て。まづ西光父子が首を刎る。其親戚を備前國より流し。難波とゐふ処を配所と定む。この比。鬼より。此意の體。いたく。討死しつる。難波二郎経遠が所領なり。食邑難波二郎経房。其釈尊を預て。倚子より下向をまつ。されども清盛の憤を。終に解ず。その年七月十日より。難波経房うけたまはりて。其釈尊の首を刎。軀は倚子倚中の堺なる。刑処とゐふ処に送捨しなり。これ當初清盛の需に。俊寛に妻。なる怨を。抜んとて。昔より。挙止るなるべし。さて又其親卿の嫡男丹波少将。其経平判官康頼。法勝寺の執行俊寛。この三人は。薩摩ぼ硫黄嶋へ。配流。さる。この外の堂衆も。刑伐差わりて。一人も漏るべからず。剃へ。多田藏人行綱は。其釈尊の趣を告訴とゝぐ。最初より。一味同意の筆頭なり。罪科脱れ。安藝國へ。配流される。行綱が今度の為体。さいさい武士の呼行はるゝ。慢ざるものなり。

（行綱赤裏元年其親隠謀の企を清盛入道に告示す。しかるに安藝國へ配流ありとぞ。）

俊寛僧都の外。法名のみ。却説。案の内の鶴の前徒壽丸とも。安良子が親里。寺谷なる。案山四郎が家。寓居して。狩場の野雞の雄を。莫へ。柯を離れ。養虫の父。とゐふ。

扇子。いたづら。絡て。難。貝の打繋蟬のゆ。衣乾うね袖を片布て。住つうね宿の水を月も秋風。ふ。立よりて。ちるる。安良子が母。思へ。泣。

（収生を業とゐふ。ちる。難産もられがの）

それが恙なくて。留る婦あり。彼此とうく。馬を牽。山轎を扛て。
呼び迎るよりん夫桑山四郎いそぐめ。名を根次平と呼れ。後夫なり。
安良子が名を継父。彼を桑山四郎と倶名とる。乳の前うつ痛の田の
畔よりまちうけ。ちかぢかとうれ。桑山子を見あれく。目標とも行よ
里入ホ件の夫婦を門田の桑山四郎。只妻の家こそ。ひなり。かて
治兼元年の夏安良子が給事をる。法勝寺の執行罪ありて。親族妻子
さへ事よあり。所従奉公の輩も。みな四散八離散。出雲の蛾王の
忠義の志を移さど。執行の奥方。寂の前。息女鶴の前二男徒丸を
扶持安良子ともよ。手筆へ脱出ずく。間方妹よ縁由を告ましし。
志ぶし舎義ありしよ。思のあいえ。むざま信ある老女なれば。弼も推
辭氣をおく。十二の年ようう安良子を。給ふ。八重薄。解られ山氣の

巣ごち鳥を。ひな子のごく情をのひて。まり。物ひひ。ひへばさうし。親の
ものうえうう。て。物のいさまさへ。紙ふる坂八。現ふうとて。拾ふ。花門の
四内ものうふあ。とある。好男子のいしはせ。とある。主君の位恐
ふう恩を禀く恩よ答ぐる八。獣よ劣まう。貌そ深山がくれの老木なれ。
ちうふ。荒の洛人よ。八芳らどと思へども。山里なれば栗の皮と。楷の蚊やり火
うでハ。歓待ふ。るものう。それざる厭ひ。ひ。ひまでもうよ世
よ。婆ぐが命のあ。ん。後八。ともあ。くもちて世をバ。ふ。ふ。ふ。ふ。
ひ。教。。。が。桑山四郎八恩も義も。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
嗚呼のものうれば。安良子が夫とも。女性孺君三人。ふ。ふ。主の供。
て。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。法勝寺八坊領許麦ありて。その
高貴八世よ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。縦事よあ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

水も問はで。彼主従が懐まハ。貯禄もあらぬべしとそゝを慈の心あてゝ
信しやうゝ管待ゝり。やがて案の前親子ハ。業山四郎ゞ京よりく駆来。
樵夫炭焼ホが高やうゝ。ちら暗潭て往来もるゝも。耳を側てきくゝ
俊寛俤ハ。年来平相国の憎しとおぼせ人なれバ。三条河原ゝて。斬
られぬゝとも実え。又ホ経康頼ホとゝもゝ薩摩へ流されぬゝとも。
これをゆくゝ。ゝ。胸を痛くゝ。おもゝ山城のゝ
ゝめれど。山ゝとゝうれバ。都の爪竹も定うのハ。ゝ。とくもる程
ゝ。六月のゝ。ゝ。ゝ。絆ゝ。俊寛ホ経康頼三人ハ。
硫黄嶋へ配流され。翌ゝて。ゝ。ゝ。ゝ。
赦免ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
哀傷鶴ゝ。徒寿丸の悲嘆。物ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

著ふゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

び。亀王丸よりの状をもたせ給ひ。渡海よりの状をもとりあへず。夜を日に継ぎて西京へ。俤は昔日よりも。西八條は禁獄なり。京極の宿所。鹿谷山荘は外うら鎖して人を入れず。女性孺君の行方。牛蛭王夫婦の在処。何地へもたづねもあへず。身の過ぎ形なれば。世に捨られて住すれども。旅の公卿はいとれど。投げやくべき方もなし。主のうりあたへをもえまず。腹かれからざやと。とかく定めさまざまいひうらへ。栗田口に宿をとり。絆の密をぞ窺ぬ。因幡の。後深州院の御宇。正喜二年秋八月上辰の日。諏訪刑部左衛門入道。左衛門尉平俊職を率て。階に伊具十郎を射殺し。絆發頭して。刑部左衛門入道の首を切る。平俊職。平判官康頼が孫なり。一旦朋友なりしかども。怨みあれば伊具を切害し。遂に硫黄嶋へ流されて。配所を糊口とすれども。悲しびべし。亦冷泉院の安元二年四月。帝久しく物狂しくぬ。西宮左大臣高明公隠謀の企あり。橘敏延僧連茂田原千晴。多田満仲うんどを空に集合。西宮殿の堺なり。在さんに。深殿式部卿親王を位に即かんと計ひ。満仲同意なりしかども。臆して絆の怒を羨はんとあり。れば。西宮殿以下の党に至るまで。忽ち流罪せられる（著京記の說是とも異説あり）。すでに満仲朝臣は回忠なれども。君のため。自の為抜群の忠節とのべし。ならるに多田行綱は。満仲八代の末孫。既に親卿の隠謀をあらはすべきなりしを告げず。満仲と行綱とその怒は相似れども。その志は雲泥の差あり。亦悲しきかな。

俊寛僧都嶋物語巻之二終